

スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団  
プロジェクト報告書

氏名：佐藤直樹

役職：准教授

所属機関：東京藝術大学美術学部 芸術学科

助成番号：15-4

申請主題：「ヘレン・シャルフベックとジャポニズムの研究」

## 1. 研究の目的

フィンランドを代表する画家ヘレン・シャルフベック(1862-1946)は、ジャポニズム旋風のパリで学んだにもかかわらず、これまで彼女の作品におけるジャポニズムの影響に関して学術的に論じられてこなかった。日本美術の影響はこれまでも指摘されては来たものの、彼女が日本美術のイメージをどのような道筋で受容し、また制作の上でどのように消化してきたのかについては全く解明されていない。日本人のシャルフベック研究者として、本年、「ヘレン・シャルフベック—魂のまなざし」展を東京などで開催したが、ここではジャポニズムの問題に取り組むことができなかった。しかし、10月31日に国立西洋美術館で開催された国際シンポジウム「北欧の近代美術とジャポニズム」で発表する機会を得たことから、シャルフベックとフィンランドのジャポニズムについて研究することが申請者の課題となった。

## 2. 研究活動

2015年8月19日から27日までヘルシンキに滞在し、シャルフベックとジャポニズムに関する調査活動を行うことができた。主な調査活動はフィンランド国立図書館と国立アテネウム美術館図書室における史料調査と文献収集であったが、8月21日にはフィンランドにおけるシャルフベック研究の権威 Leena Ahtola-Moorhouse 氏にシャルフベックのジャポニズムに関する見解などをインタビューし、23日にはアテネウム美術館のアーキヴィスト Leena Ilkko 氏から文献資料収集やシャルフベックが書いた手紙の内容の解読に関する協力を得た。また、24日にはユレンベリ美術館の Nina Zilliacus 氏を訪問し、シャルフベックが浮世絵をヘルシンキで見た可能性について有益なディスカッションを

することができた。日本では調査不可能な情報を多く得ることのできる貴重な研究滞在となった。

### 3. 成果発表の方法

研究成果は、10月31日に国立西洋美術館で開催された国際シンポジウム「北欧の近代美術とジャポニスム」（プログラムを添付）において発表した。このシンポジウムの報告書の出版にむけて現在準備中であり、出版後、ただちに送付する予定である。私の報告は、日英二カ国語の出版となるので、海外のジャポニスム研究者の反応が期待される。

### 4. 本研究の総括と今後の展望

シャルフベックがパリ留学中に浮世絵の実物を見る機会に恵まれていたことが、当時のパリで開催された大型の浮世絵展やパリの美術商であった林忠正が大量に浮世絵を輸入していたこと、さらにサミュエル・ビングの店と合わせて16万点以上の浮世絵が流通していたことから明らかになった。シャルフベックが留学する前後には、フィンランドの画家ペッカ・ハロネンとアクセリ・ガッレン＝カッレラがパリに留学しており、この二人もジャポニスムの洗礼を受け、浮世絵その他の美術品をパリで購入していた。つまり、パリの美術商などを通してフィンランドにも日本の美術品が流入していたのである。ハロネンは1894年に、ヘルシンキ大学図書館（＝国立図書館）には「古い日本のあらゆる種類のものがある」と興奮気味に語っていたため、ヘルシンキ大学図書館（＝国立図書館）の「ジャポニカ・コレクション」(Japonica Collection)を調査したが、そこには浮世絵などの現物はないことが確認された。つまり、ハロネンは日本に関する古い書籍から情報を得ていたのだろう。

同様にシャルフベックも、フィンランド帰国後はパリやロンドンの美術雑誌やモード誌などを継続して購読していることから、ハロネン同様、書物という媒介を通してフィンランドでジャポニスムの影響を受けていたに違いない。その証拠のひとつとして、シャルフベックが「ロートレックが日本美術に影響を受けたカラー図版がふんだんに掲載された画集」を手に入れようと必至になっている様子が手紙に残されている。1921年に親友の画家マリア・ヴィークに書かれたその手紙には、兄にその本を買うように頼んだが、絵が気に入らないという理由で（おそらく高価だったことが原因と思われる）買ってくれないこと

を嘆き、どうしてもそれを手に入れるつもりだと宣言していることが興味深い。シャルフベックが、ロートレックを経由して日本美術の特徴を学んでいたことが確実となる証言である。当時、カラー図版入りの書籍というのは貴重であったため、その本を簡単に突き止められると思ったのだが、残念ながら、1921年前に出版されたカラー図版が入ったロートレックの本を見つけることができなかった。図版入りの本というのが、実はロートレックが出版した版画集《彼女たち》のことではないかと想像するのだが、これに関しては今後の調査課題となった。

また、シャルフベックの作品に特徴的な真っ赤な口紅のついた唇の表現に関しても、1870年にパリのゲラン社から発売されたリップスティックの流行と関係していることを指摘した。パリでの口紅の流行自体が、高級娼婦のファッションから発しているのだが、娼婦の装いがパリの上流階級の女性たちに受け入れられるようになったのには、日本の浮世絵で描かれた吉原の女性たちの顔の表現に人々が憧れたジャポニスムの影響があるのではないかと、申請者は推測するに至った。リップスティックの歴史については、学術的な研究と文献がまったく見当たらないことから、夏にパリのゲラン社で史料調査をする予定である。19世紀パリの化粧の流行が、浮世絵の女性たちに端を発しているとしたら、それは大きな発見となるが、これも今後の調査課題である。

## 5. 印刷物および資料等の添付

シンポジウムのチラシは別紙で添付。シンポジウムの報告書の論文は出版後に送付予定。